

熊本市中心市街地の公共空間整備を事例とする研究・教育活動

建築学科 両角光男

1. まちなか工房における研究教育活動の背景

熊本市の中心市街地は、多くの地方都市同様、空洞化問題が徐々に深刻化しており、熊本市は、都市の顔ともいべき中心市街地の活性化を重点施策の一つに置いている。

申請者の研究室でも地元大学として中心市街地活性化に向けた市街地整備の指針を提示すべく、熊本市都市整備局や地元商店街等と連携して、中心市街地の物的環境の変化動向や、そこにおける市民の生活行動調査を卒業論文や修士論文のテーマに設定し、調査研究に取り組んできた。平成17年度も土地利用や建物利用の現状と変化動向、都市的楽しみの場として中心市街地を訪れる市民の回遊行動や買い物行動の特性分析を課題に、まちなか工房を拠点に研究に取り組んだ。

2. 平成17年度の研究教育活動テーマ

①「都市空間における来訪者の回遊行動と空間認知に関する研究」 リンクつき QTVR で再現した上通地区の回遊行動シミュレータを用い、路上の各地点で得られる視覚情報（視覚刺激）と回遊行動（経路選択、首振り、注視など）との関係を探り、回遊行動を誘発する街なみなどの物的環境整備指針を得る研究。2人1組で対話しながら30分間回遊行動を試行し、その行動や発話記録と QTVR 映像との関係を考察する。本年は、各地点における被験者の行動目的とその種類、周辺環境に対する関心の有無、迷いの状態などに着目した状態モデルを提案し、合計20組40名の観察資料から各状態発生量に着目した通り区間毎の性格を分析した。

②「QTVR 画像で捉えた街なみ変化と回遊行動に与える変化の予測」 前項では平成13年に撮影した QTVR 画像を用いた。本年度もほぼ同じ条件で QTVR 画像を作成した。主要な通りについて10m間隔で撮影した2時点の画像記録を比較し、被験者が眺める町並みの変化と、それがシミュレーション時の行動に与える影響を推察した。

③「上通地区の『通りの公共空間』の現状と環境整備の提言」 道路に隣接し道路と一体的に利用されている敷地内空気を「通りの公共空間」と定義し、上通地区におけるその形状及び利用状況を示す平面図を作成。

事例を類型化しそれぞれの魅力や改善課題を整理した。連続して存在する空地にビル建設が進んでおり、その際に、街区を横切る歩行者路網や中庭の建設を誘導することが地区の魅力向上に繋がることを提案した。

④「消費行動・余暇行動の場としての熊本市中心市街地の特性研究」 郊外ショッピングセンター建設が続いていることを踏まえ、居住地ベース市民アンケート調査を実施、人々の余暇時間における各種商業施設の訪問頻度やその変化動向を分析した。郊外 SC の吸引力が高まりつつある一方、依然「まちなか」を楽しみの場として利用する市民が少なくないことを確認した。

⑤「中心市街地の建物の床利用現況調査」 中心市街地約1600棟の建物各階床の利用状況を現地調査した。平成14年から毎年実施している調査である。空室、空床が恒常化している地区の広がりや、若者ファッション・グルメなど個性的な界限形成の状況を確認した。

①～③の研究成果は、それぞれ日本建築学会研究報告九州支部計画系、第45号・3（北九州大学）、平成18年3月で発表した。また①～⑤は日本建築学会大会学術講演会（横浜）平成18年9月にも投稿している。

3. 研究プロジェクト参加者

環境システム工学科：三好涼子、永岡広太郎、江頭雄一、須田沙菜美、南部泰博、濱本樹奈
博士前期課程建築学専攻：高田昌太、内田成紀、上野洋一、松永直美、財津麻子、中林武、
博士後期課程：末繁雄一
指導教員：両角光男、富士川一裕、前田芳男

4. 総括

次の狙いでまちなか工房に研究拠点を設けた。①対象地区内に拠点を置くことに伴うフィールド調査の利便性向上。②地区の生活者となり、関係者の声を日常的に聞きながら課題に取り組むことにより、具体的かつキメ細かな観察が可能になる。③拠点を街に置き通常のゼミも原則公開することで、学外者の日常的な協力連携が増えると期待される。学生は工房主催まちづくり学習会等を通じ地元商店街や行政関係者と之面識を深めたなど当初期待した成果は十分得られた。